

## 甲佐高等学校所蔵の野口雨情墨書について

平成24年9月19日

文責：甲佐高等学校長 蔵田勇治

熊本県立甲佐高等学校の校長室入り口の通路に、一幅の墨書が掛かっている。その書は県立甲佐高等女学校の為にかかれており、地域の教育に対する熱意と地域から出た軍神に関する内容ではないかと私なりに解説していた。地域における甲佐高校への期待が感じられることから(後に、「建てた勲は郷土のほこり」即ち西住戦車長の軍功をたたえる内容と解説)、私は、来室者にしばしば、その書を紹介し、地域の期待に応える学校づくりへの意欲を語っていたが、本書が誰の書であるかについては、落款名が判読できなかつたこともあり、意に介することがなかつた。

そのような折り、学校新聞「甲佐高だより」に本墨書を紹介し、「地域に根ざした学校、地域に根ざした教育」について触れることにした。このことを機会に、念のため書道の免許を持つ本校職員に本墨書を読んでもらった。本墨書の落款名を見た職員は即座に「ウジョウ」と読めます、と答えた。「雨情といえば野口雨情か？、まさか」とは思いつつ、私は大きな期待を持って雨情を調べ始めた。

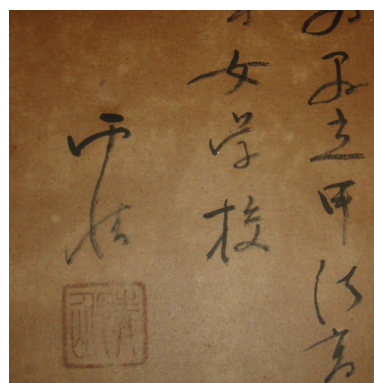
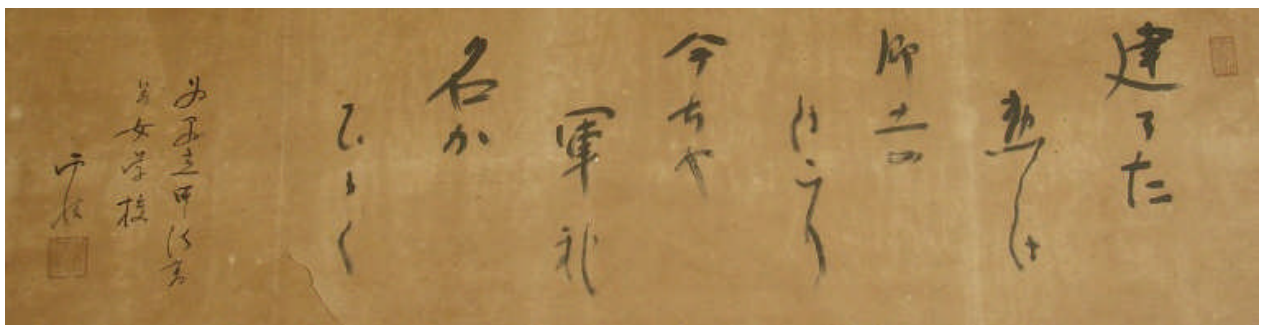
まず、茨城県に「野口雨情記念館」があること、そこに所蔵されている書の落款が本校の書のものと同様していることがわかった。期待は膨らむ一方である。はやる心を抑えながら、インターネットで更に調べると、各地に残る雨情の書の書体、「～ちや」といった独特の言い回しなど、雨情の書であることを確信させるものばかりが出てきた。更には、甲佐町のやな場には昭和16年に雨情が来町し歌を作った碑が建立されており、そこに刻された落款と落款印が本校のものと同様していることも判明した。そこで私は、茨城の野口雨情記念館へ電話を入れ、本校所蔵の墨書について説明し、写真を電子メールで送って意見をいただいた。以下は、本校からの依頼と記念館からの返事である。

### <甲佐高校から送った意見依頼メール>

突然の連絡の非礼をお許しください。私は熊本県立甲佐高等学校の校長の蔵田勇治と申します。実は、本校校長室の入り口に目立たぬ形で古い書が掛かっております。書の内容は「地域の暑い情熱で建った甲佐高女(現甲佐高校)、その情熱は郷土の誇りである。今では軍神(軍神と言われた西住戦車長のことと推測)の名が広く轟いている。雨情」と私なりに解説しています。雨情は昭和16年に甲佐の地を訪れ現在でも「甲佐小唄」として親しまれている歌を作っており、その石碑も町内(鮎のやな場)に建っております。本書は、おそらくその折りに書かれたものではないかと推測しております。そこで、まことに不躰なお願いですが、記念館のご意見もいただければと思い本メールを送っています。このメールに添付ファイルで書の全体写真と名・刻印の部分の写真をjpgファイルでお送りします。

どうぞよろしくお願いいたします。

平成24年9月6日 熊本県立甲佐高等学校長 蔵田勇治



<野口雨情記念館からの返事メール>

熊本県立甲佐高等学校 蔵田校長先生

お問合せありがとうございます。

早速ですが、書については間違いなく雨情の書と思います。  
落款も雨情の筆跡ですしそこにある落款印も間違いありません。「情仙」と書いてあります。  
冠帽印も「草深所」で間違いありません。

甲佐小唄についてですが、雨情の研究家であります東 道人さん著「野口雨情詩と民謡の旅」の中で、『詩作ノート「旅の風草」にある<甲佐>と題する詩十節は昭和十六年に訪れた際の作品である。』とありますので、昭和16年にそちらの学校で講演をされたのではないかと推測いたします。  
また、昭和9年10月5日に県立人吉高等女学校に於いて、昭和9年10月8日午前11時から県立八代高等女学校講堂に於いて国風の題で講演をしておりますので、この時に県立甲佐高等女学校でも講演をしたのかもしれない。

はっきりした答えができなくてすみませんが、間違いなく雨情が県立甲佐高等女学校に残した書と思いますので、大切に保存してください。

先日の大雨洪水におきましては、大変な被害に遭われたかたも居られることと思います。  
心よりお見舞い申し上げます。

北茨城市歴史民俗資料館・野口雨情記念館  
稲野辺 典彦

雨情記念館のこの意見を持って、本校校長室に掛かる墨書は野口雨情の直筆の書であることが決定的となった。

今後は、紙等の劣化を防止するなど大事に適切に保管しつつ、在校生や卒業生、地域の人々と等に機会を見て広く公開披露していきたい。

また、本墨書が書かれた当時の在校生が御存命であるなら、当時の様子等を拝聴し、記録していくことも必要であろう。



野口雨情の書